

## 【地下鉄7号線延伸に関する報告書（要旨）】

### 計画概要

地下鉄7号線（埼玉高速鉄道線と東京メトロ南北線の通称）は、平成12年の国の答申で浦和美園～岩槻～蓮田までの延伸が位置づけられた。本検討委員会の検討対象は浦和美園～岩槻の約7.2kmである。

延伸線は「埼玉スタジアム駅（臨時駅）」、「中間駅」、「岩槻駅」の3駅を新設し、浦和美園から岩槻の既成市街地手前までは地上（高架）それより北は地下を走る構造であり、概算建設費は約770億円である。運行については各駅停車を基本とする。また、「都市鉄道等利便増進法」による事業手法を前提とした。受益活用型上下分離方式と国・地方自治体による補助を大きな特徴とし、現時点では最善の事業手法であるといえる。

延伸線沿線のまちづくりでは、中間駅周辺について開発コンセプトなどのまちづくり案が示され、大規模な開発が進展中の「浦和美園」、観光のまちづくりについて検討が進む「岩槻」についても、地域の現状やまちづくりの取組みについて確認した。

### 検討の流れ・評価方法

検討に当たっては、まず「社会経済情勢」について議論し、人口減少等を踏まえて検討することが確認された。そして、いまの時代に適合する「延伸の意義・必要性」も整理した。他の鉄道事業と比較しながら建設費の妥当性を確認するとともに、運行計画についても他路線との比較や快速運転の取扱いなども検討した。

本検討委員会では、評価方法として「総合的評価」を採用した。貨幣換算可能な効果と事業に要する費用を比較する「B/C（費用便益比）」、経営的視点から事業の収支見通しを評価する「採算性」、貨幣換算できない効果や定量化が困難な効果を評価する「事業による効果・影響」の3つを総合的に勘案して評価を行う手法である。

### 需要予測・採算性・B/Cの試算等

B/Cと採算性の評価を行う前提となるのが、鉄道を整備した際の乗車人員を予測する「需要予測」である。過去の予測値と実績値の乖離事例など需要予測に対する不信感を払拭するため、需要予測モデルを徹底的に精査し、最新の需要予測モデルを構築した。そして、人口減少・リスク等を踏まえた検討を行うために、需要予測のケースを1つに絞るのではなく、開発による人口増加や快速運転など様々な条件を設定して、複数ケースの需要予測、採算性、B/Cを試算した。

検討の基本とした「慎重ケース」（人口減少等を踏まえるとともに、開

発、快速運転等による需要増加を加えないケース)では、需要予測は2万3,900人/日(平成32年)採算性は資金収支累積黒字転換44年、 $B/C=0.9$ (30年)という試算結果となった。施策による需要等改善効果を見る「感度分析ケース」では、一つの施策で迅速かつ確実に採算性と $B/C$ を向上させるまでには至らなかったが、まちづくりや快速運転など各施策が高い効果を有することが見て取れた。

また、「事業による効果・影響」については、高齢社会対応、代替交通確保、地域の再生、持続可能なまちづくりなど、多くの効果・影響があると評価した。

### 延伸実現に資する方策

慎重ケースの $B/C$ と採算性は一般的な目安( $B/C > 1$ 、採算性：累積黒字転換年次30年)に届いていないことから、人の流れを作り出し、採算性を改善させ、 $B/C$ を向上させるための「延伸実現に資する方策」の検討が必要となった。

方策としては「開発・まちづくりの推進」、「人流の創出」、「鉄道サービス水準の向上」、「営業主体の工夫」、「資金調達の工夫」、「コスト縮減」、「既設線の利用促進」について検討し、その取組み内容を整理した。また、一つの方策に偏るのではなく、複数の方策を組み合わせることで推進し、行程表の作成・目標の設定など管理・推進体制も整えることが必要である。これらの他にも、既存の制度の枠にとらわれない方策(制度改正、企業・教育機関誘致など)についても検討した。

### 評価/延伸の方向性

慎重ケースの試算結果は、一般的な目安に届いていないものの、延伸実現に向けての明確なスタートラインである。現時点で方策の成功を当て込んで事業化を図ることは難しいが、関係者の努力によって方策を展開し、沿線地域の活性化等を進めることで、プロジェクトの評価を高めることは可能である。延伸実現に向けては、延伸実現に資する諸方策を取捨選択し、組み合わせ、進捗を丁寧に確認しながら、推進していくことが必要である。延伸実現にはある程度の年月を要するかもしれないが、速やかに行動を起して結果を求めていくべきである。

延伸実現を目指すにあたって大前提となるのは、政治・行政・地元など全ての立場の人々が「地域を育てる」、「鉄道を育てる」という同じ思いを持ち、傍観者とならずに自ら「行動」することである。夢は、自ら、一歩踏み出し行動しない限りは実現しない。そこにこそ、新しい未来が拓ける。